Back to the Wild

『Back to the Wild』

自然へ旅に出かけよう。

僕たちが自然と繋がれるアウトドアという文化を
もっと世に広めて多くの人に親しんでほしい。

そうすれば自然から離れてしまった僕たちが再び
自然とともに生きていけるのではないか。

そのような想いから作る本です。

Member

INSTAGAM @zetuenonly

カヤック、登山、バックカントリースキー、野宿、釣り、自転車、アウトドアを網羅したエキスパート。経験はもちろんだが、道具の知識や野外での使用方法などの発想も半端ない。何より自然が好きな子どもに負けないピュアな心の持ち主。ドローン撮影の担当。

この旅の名言

『音楽フェスとカヤックしておけば世界平和になる』

INSTAGRAM @nagatom_akphoto

この記事の筆者。大好きな場所はアラスカの北極圏国立野生動物保護区と北海道の大雪山。旅をしながら写真を残して自然の美しさや大切さ伝えたいと活動中。空撮以外の撮影担当。

私の３箇条

『自然を一番に物事を考えること』、『写真よりも自然を楽しむべし』、『撮影中は酒を飲むべからず』

今回の旅は天塩川

道北地方を流れる天塩川は人工物がなく約１５７kmノンストップで漕げる区間があり、
カヌーツーリングに憧れる者にとって聖地ともいえる場所ではないか。
秋も終わる１１月中旬過ぎ、２日間かけて仲間とフォールディングカヤックで３０kmほど下った。
川下りのハイシーズンはとっくに終わっており、快適な舟旅とはいかない季節だが、
水の冷たさや北風が肌に当たる感覚、雪景色の中で出会ったワシやエゾシカ。
仲間と焚き火を囲んで語った時間、そして満天の星。自然の雄大さや季節の移り変わりを感じ、
静かで特別感のある旅ができた。

左/美深のカヌーポート付近からスタート。道の駅のすぐ側にあり出着艇しやすい。中流域の名寄市からは天塩川沿いの街にはカヌーポートが十分にあり、ルートを決めるのに悩むことも少ない。また、カーヌーポートや上陸可能地点などの詳細が載ったリバーマップがインターネットで手に入るので、フィールドや計画時に活用できる。

使用カヤック
FUJITA CANOE ALPINA-2 460（黄色）
ARFEQ VOYAGER460T（赤色）

撮影＝@zetuenonly

右/フォールディングカヤックはフレームを組み立て船体布で覆いテンションをかけながらカヤックの形を整える。雑にすると変な癖がついてしまうこともあり急がずに正確に組み立てたい。
下/１１月中旬過ぎだったので寒さを覚悟していたが暖かい陽の中で漕ぐことができた。相方はドライスーツを着ていたが、自分は防水のパドリング用のパンツとアノラックで絶対に転覆しないように注意しながら進んだ。ドライスーツを持っておくと秋からは安心だ。

北海道の川をキャンプツーリングしよう、２０１７年にカヤックを買った時からの夢だった。しかし、それよりも先に毎年行っているアラスカ撮影でカリブーやオーロラ、紅葉に染まるブルックス山脈の景色をカヤックで移動しながら写真に残そうと構想し、２０２４年に実行した。結果的にはスタート前に船体布を破り何もせずに帰国してしまい、このフラストレーションをどう落ち着けよう、そんなことを考えていた。とりあえず原点に立ち戻ろう、つまりは始めに夢を描いた北海道の川でテントを張り、焚き火なんかをしながら漕ごうじゃないかと。1人で川を下る計画を立てていたが、アウトドア仲間に天塩川を下ると伝えると休みを取ってくれて二人で行くことに。彼はアウトドアに関してまさに玄人で何より自然がとても好きな人間というところがとても素敵だ。当初は一人で行く計画だったので帰りは電車でスタート地点に戻る行程だったが、車二台をそれぞれスタート、ゴール地点に配置し下り始めた。

漕ぎ始め早々にオジロワシやエゾシカが姿を現し、すぐに雄大な自然を感じさせてくれた。彼らの姿を写真に残そうとしたがどうしてもすぐに逃げてしまい、写真を撮ることはできなかった。動物たちが出てくる度に右往左往したり、ドローンを飛ばして空撮をしたりで全く進まなかったがそれで良かった。そうやって自由に楽しむことが僕たちの目的で今回旅を共にしてくれた彼と共感できていると点だと思っている。もちろん時間には制限があり、ある程度決めなければいけないことはあるが、自然に入ることが最も大事なことでその他の目的なんて二の次、三の次でとりあえずゴール地点に辿り着けば問題はない。なので1泊2日の行程でキャンプをここに設営しようなど細かい計画はしていない。純粋に自然を楽しみたい、自然に入っている時間でどのようなことが起こるのかワクワクしながらパドルを漕いでいった。

天塩川は川幅が広いわりに激しめの瀬があり、ゆったりにスリリングも加わった川旅を楽しむことができ、相方も予想外に瀬が激しかったと言っていた。川を旅するためにフォーディングカヤックを購入したのが２０１７年、実はその後にすぐにパックラフトも買ってそれをメインに使っていた。パックラフトは空気を入れ膨らませて川を下り、空気を抜けば収納された山岳用テントほどの大きさになるため、バックパックにくくりつけて携行可能なインフレータブル艇だ。アラスカが発祥で川や湖沼が多い山の中で効率的に探検するために生み出されたが、近頃日本でも川下りで使う人が増えている。パックラフトの手軽さもあり川でフォールディングカヤックの出番は少なくなっていた。しかし、種類にもよるがパックラフトは長さが２ｍを少し超えるほどしかなく、天塩川などの広くて流れが緩い川だと進みが遅く適していない。フォールディングカヤックは４ｍを超す長さで形状がシャープなので圧倒的に推進力を得ることができる。そのため長距離の川旅に出る際には最適な選択肢だと考えていたが、まさに雄大な北海道の川を下るための舟だと漕ぎ始めてすぐに感じることができた。それにしても川幅が広くアラスカの川にいるような感覚もあり、橋を通る車も目に入る。ワイルドと人工物が混ざり合う不思議な空間が北海道らしい面白さを感じられる点だなと思った。

撮影＝@zetuenonly

右/太い薪を地面に並べ、その上に火を熾した。いい具合に湿った木が乾燥して燃えていき、暖かさを保って夜を過ごすことができた。ケトルを使うと旅の雰囲気が格段に上がる。
下/薪をカヤックに積み込む。これだけでも自給自足感があり楽しい。

３時間ほど漕ぐと上陸できる中島があったので寄ってみたところ、なんかここでよくないということでキャンプ地とした。正直、テントを張りたいと思えるような河原が見つからなかったし、ここしかないんじゃないかと考えていたまさにその時に相方からのドンピシャの打診をいただけたので即答できた。

相方が薪を集めましょうと中島からカヤックで川岸に渡り、落ちている太めの枝をノコギリで切り始めたのでそれを手伝った。さすがの彼はしっかりと使いやすいノコギリを持ってきていたが、僕は準備していなかった。アラスカだと乾いて簡単に折ることができる木がたくさんあったので、天塩川でも薪は簡単に入るだろうと思っていたがノコギリがあって本当に助かった。ある程度集め終わるとそれらをカヤックに積み込んで中島に戻りさらに細かく切った。それにしてもカヤックの遡行力には驚かされた。流れが早いところだとさすがに遡ることは厳しかったがそれでも下流に流されずに平行移動して中島まで薪を運べ、パックラフトとの違いをここでも感じた。

それぞれテントを張る場所を決めて焚き火を囲むこととした。やはりカヤックツーリングの醍醐味といえば焚き火を囲んで語らう、これが一番だろう。明るいうちに秋の夜長に備えた我々は温かい飲み物やお菓子を食べながら話していたが、時計を見て『まだ５時かよ！笑』なんてやりとりを繰り返しては秋の夜長に恐怖していた。しかし、いくら話してもネタは尽きることなく「なんで自然に入ると楽しいって思うのか？」、「いつものメンツでユーコン下りたいね。」、「カヤック業界を盛り上げたいよね。」、「どうすれば多くの人に自然を好きになってもらえるか？」。自然そのものが好きな相方との話は湧くように出てくる。そして時計を見るともう１１時、焚き火の前で語り合うと秋夜ですら短く感じるようだ。時間はあっという間に過ぎ、焚き火の残り火が名残惜しさを感じさせた。

星空が好きだという相方。まだかまだかと暗くなっていく空を見上げて星を探す。一番星を見つけた時の嬉しさは大人になっても変わらないのはなぜだろう。子どものままだからだろうか？笑

焚き火の側に寝そべり星空を眺める。
天井に散りばめられた砂のように手が届くのではと錯覚してしまうが、
目を凝らすとそれがとてつもなく遠くにあるものだとも理解できる。
大昔の人はなぜ夜になると空に輝くものが出てくるのか、
不思議に眺めていたんだろうか。そんな想像を楽しんだりして過ごした。

僕たちは酒を飲まなかった。
僕は仲間とキャンプ場で過ごす時はお酒を飲ませてもらっているが、
アラスカの原野や大雪山を縦走するときも一滴も飲んだ経験がない。
この日、エゾシカやオジロワシは僕たちが現れてさぞ驚き恐かったであろう。
写真家として人より多く自然に入る身として酒を飲むことは
自然に対して僕は失礼だという気持ちがある。
それに酒を飲まなくても満天の星に酔えるじゃないか…。

２日目の朝はカヤックが凍るほどの気温で冬は間近というよりも最早冬だったのだとこの時に確信した。昨日の燃やした薪の熾火を利用して火を熾し、温かい物を飲んで準備を始めた。前日は１０℃以上気温があったのにこの日は最高４℃ほど。出発準備中に素手で凍ったカヤックやパドルを触っていると軽い凍傷になったのか、旅を終えた１週間ほど入浴時に痛みが走った。荷物をパッキングして服を着替えようとするがこれがなかなか勇気がいる。外気温が寒いのはもちろんだが、川の側なのでひんやりとした寒さを感じた。何よりも手や足に前日濡れて夜の間に凍ってしまったネオプレン素材の手袋や靴下を履くのが一番気持ち的に嫌だったが、一度つけてしまえばその後は冷たさは感じなかった。

前日と違い日差しはなく暗かったが、晩秋や初冬の雰囲気を感じさせてくれ、時折吹く北風が今シーズン初めて体を震わせる冷たいものだった。空気が冷えた中で水に入り準備するのは非常に億劫だったが、漕ぎ始めると適度に体温が上がるのでパドリング中は全く寒くなかった。また対策は事前にしっかりと考えてきており、カヤックのコックピットにはコーミングカバーを取り付けたので水が舟の中に入ってくることはなくほとんどなかった。その他にも足や手には厚手のネオプレン素材のもの、さらに袖にはリストバンドをして可能な限り体が濡れないようにした。以前、川をパックラフトで下っていた時に雨で全身ずぶ濡れになりながら漕いだが、風雪に耐えるよりも寒かった。そのことを思い出し準備の段階で寒さにめちゃくちゃビビり対策したことが功を奏した。しかし、転覆すると体が濡れることは避けらないので慎重に漕いで進んでいった。

この日、ワシ以外の生き物を見ることはなかったが、時間に縛られることなく楽しむことができた。瀬を見つけてはわざわざ進路を変えたり、どれくらいスピードが出るか激しくパドリングしたりした。川幅は広く遠く先まで見ることができ、北海道の大きさを感じられる雄大な川だと改めて感じた。途中にアラスカカーブと名のついた場所がマップに載っていて楽しみにしていたが、はっきりとここだということはわからなかった。川沿いをJRの単線が走っており、一度だけ列車が走っているのを見た。列車に乗って自分の下った川を見ながら自宅まで帰ったりしてみたいものだと思った。不便ではあるだろうがそんな旅もしてみたいと考えたりしながら3時間ほど漕ぎ、音威子府のカヌーポートに到着して今回の旅は終わった。

これくらいの瀬でも舟に水が打ちつけられる感覚があり楽しい。川幅も広くたとえ転覆しても夏なら危険も少ない、転覆した舟さえ回収できればいい思い出で終わるのではないか。毎年行われている天塩川カヌーツーリング大会「ダウン・ザ・テッシ-オ-ペ?」に参加した相方が沈した舟を見たと言っていたので、場所によってはなかなかの瀬があると思われ、カヌーを始めたての人はこのような大会から慣れていってもいいのかもしれない。

What is a Folding Kayak?

フォールディングカヤック（Folding　Kayak）は英名の通り折りたためるカヤックで、ドイツ語名でファルトボートとも呼ばれる。骨組みのフレームを組み立て船体布にそのフレームを入れ込んで完成！！慣れたら２、３０分ほどで組み立て可能で、今回行ったような川だけでなく湖や海でも楽しめる。

このカヤックの良いところはなんと言っても携行性。重さは２０ｋｇ前後から重いものだと３０ｋｇを越すものもあるが大型のバックパック程にまとめることが可能で、電車やバスなどの公共交通機関を利用した川旅も可能。このフォールディングカヤックを使えば全国、世界の川を下りながら旅ができる。

カヤックに必要な道具は？

カヤックは基本的に濡れてしまうので寒い季節はドライスーツが一番安心だが、パドリング用の防水のジャケットやパンツを最低限用意したほうがいい。また足や手も冷たくなるのでネオプレン系のグローブや靴下、パドリングシューズも必要で時期や天候、場所で服装は変わってくる。夏でも水温が低く陽が届かない川はかなり寒く感じる。

濡らしたくない衣服やカメラなどを入れる防水バッグ。ロールアップ式は完全に水を浸入することは防げないが、高い防水性があり以前パックラフトで転覆した際も中に入れていたカメラは守られていた。また、パックラフトで使うバウバッグ（Bow Bag）というものもあり、ジッパー式ですが完全防水の製品があり、相方はうまいことカヤックに取り付けていた。特に電化製品などはこの防水バッグに加えてさらにプラスで対策しておく必要がある。

命を守ることにおいて川下りで一番大事なギア。ライフジャケットやPFDとも言われ、川に落ちた時に浮力のおかげで顔がしっかりと水面から出せる。また様々な種類があるので自分のスタイルに合ったものを選ぶのがいい。女性用もあり、男性用に比べると胸部の圧迫感がなく快適にパドリングできる。

ベアキャニスターという食料を熊などの動物から守る容器。カヤックとは関係ないが、北海道の自然の中で過ごすなら用意しておきたい。食料や歯磨き粉などの匂いの出るものは全てこの容器に入れてテントから離して置いておく。熊だけでなくキツネやネズミなどからも食料を取られる心配がない。

快適な旅をするために大事なのがパドル。素材はカーボンやファイバーグラス、ナイロン、アルミなどがあり、また用途によって素材だけではなくパドルの長さ、ブレードの形状など自分のスタイルに合ったパドルを選ぶ必要がある。また最大で4分割できるものもあり、携行性に優れるので旅に出る際はおすすめだ。（分割できるほど重くなり耐久性は低くなる）

ツーリングするなら寝床は必要だ。カヤックに積むので山岳用テントのように軽量性はあまり気にしなくていい。テント時間を快適に過ごせるような室内や前室スペースが広い製品が個人的にはおすすめ。

このカヤックを使ってどんな旅をしようか、
天塩川はそんな想像や情熱を掻き立ててくれる素晴らしい自然だった。
次は河口の日本海までのロングトリップや石狩川や十勝川、釧路川など北海道を
代表する川たち、アラスカの原始的な川、それぞれどんな旅になるのか。
楽しみにせずにはいられない。

さあ、旅に出よう。